

伊周 紹介SS

『老紳士と甘美な風景』

秋田みやび

北御門家には、十二天将という式神たちがいるらしい。

まだ全部は揃っていないらしいし、眠ったり、様々な事情で外に出ている式神もいるらしいので、嫁入りした北御門芹もまだ全員とは顔合わせをしていない。

とはいえ、本邸で稼働中の式神たちとは挨拶をすませている。

本邸の手入れを主な役目としている大陰の銘を持つ律と、式神たちをまとめ上げているという貴人の銘を持つ伊周。

この二人は式神の中でも古株なのだが、あまり家族が住まう離れの方には顔を出さない。

しかし、貴人・伊周は意外と好奇心が旺盛なほうであるらしい。

今も、ダンディな白い美髯を蓄えたタキシード姿の老紳士は、白手袋の手で芹がうっかりと取り落としたスマートフォンを拾い上げて、渡してくれるのかと思いきや、しげしげと物珍しげに眺めている。

「えーと、伊周さん？」

「ああ、失礼いたしました。芹殿。皇臥殿とはまた違う形の、すまほ、なのだと思ひましてな」

我に返った伊周は、丁寧な仕草でスマホの画面を胸に入れていたハンカチで拭い、芹へと手渡してくれる。

「あ。うん。伊周さんもしかして、スマホに興味ある？」

「そうでございますな。電気設備の悪い本邸には、あまり電化製品を置けない事情もありまして、こういったガジェット類には疎うございますゆえ。皇臥殿がパソコンを使う様子を、後ろからこっそりと覗くのが精々と言ったところ」

にこやかに笑いながら、伊周は背筋を伸ばした。ふと気づいたように一本指を立て。

「あ、しかし。老骨とはいえまったくの無知とは思わないでくだされよ。離れの建設前に本邸に導入されたオープン電子レンジの扱いなどは、史緒佳殿よりも巧みであったと断言いたしましょう。史緒佳殿のプライドを傷つけぬよう、披露はできませんんだが」

茶目っ気たっぷりに、片目を瞑る。

「そうなんだ。……で。その電子レンジで、何を作ってたの？ ていうか、つまみ食い？」

老式神の表情に、つつい興が乗ってしまった芹が言葉尻を捉えて追及してみる。

「……簡単なガトーショコラとファールトンを少々」

「意外とハイカラだった！」

実は芹はお菓子作りは少々苦手だ。

対して